

『今月の天候と農作業』

通巻第5641号

7月号

令和2年7月9日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。
期間のはじめを中心に前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間のはじめは、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。その後は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 7月11日(土)～ 7月17日(金)

前線や湿った空気の影響で曇りや雨となるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2 週目の予報> 7月18日(土)～ 7月24日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 7月25日(土)～ 8月7日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

一 水管理と防除

台風が来る際には、倒伏を軽減するため深水とします。台風通過後も吹返しの高温乾燥風で収量・品質に影響が出ることがあるため、風がやむまで十分な湛水状態を保ちます。収穫前の落水が早いと収量や品質が低下する恐れがあるので、落水は収穫五日前とします。

早期水稲では、今年もカメムシの注意報が出ており、甚大な被害が発生した平成29年より多い発生となっています。穂揃い期とその7から10日後の2回防除を徹底します。発生が多い場合は追加防除を行います。

二 収穫と乾燥調製

米の食味や品質には、適期収穫と適正な乾燥調整が大きく影響します。収穫適期は全粒の八割が黄化した時期です。早刈りでは青未熟粒が、刈り遅れでは胴割粒が発生しやすくなります。収穫後は速やかに乾燥作業へ移し、乾燥は四〇度以下で行います。毎年、過乾燥の玄米が多くなっているため、適正水分の一四・六～一五%に仕上げます。

◆普通期水稲

一 水管理

中干しは茎数が二〇本程の頃に始め、田面に足跡が軽く付く程度に干します。中干し後は走水を一回～二回行い、その後は間断かん水とします。

二 病虫害防除と追肥

葉いもちやウンカ類の予察情報に注意し、ほ場をよく観察します。

穂肥は「ヒノヒカリ」では幼穂長が一センチの頃が適期で、葉色により施肥量を決めます。窒素の追肥量が多いと食味の低下や倒伏につながりますが、少なくとも出穂後の高温で白未熟粒が発生しやすくなるので、適正な施肥量に注意します。

◆大豆

一 ほ場準備と播種

苦土石灰で酸度矯正を行い、元肥量は前作を考慮し行います。発芽が揃うよう耕耘は丁寧に行い、ほ場周囲には排水溝を設置します。播種は発芽安定と鳥害軽減のため、薬剤を粉衣し、条間六〇～七〇cm、株間二〇～一〇センチ位で行い、覆土は二～三センチにします。播種が七月下旬以降になる場合は密植にします。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆夏秋野菜の高温対策

中山間地域の露地きゅうり、雨よけトマト、ピーマンなどでは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では梅雨明け後の高温対策が重要となりますので、ハウスは日中できる限り解放して換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用し、2～3割程度の遮光を行い、ハウス内の気温をなるべく低く低く果実・葉の温度が上がらないように管理します。また、同時に循環扇を利用すると、温度上昇を抑制する効果があります。

特に、曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるので、早朝からのかん水や、翌日が確実に晴れの場合は、前日の夕方のかん水も効果的です。

なお、薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の障害が発生しやすいので、日中高温になる時間帯を避けて、午前中の早い時間帯か午後温度が低下する時間帯に行います。

また、雨よけ野菜栽培では、ヨトウムシ類に対して、野菜類登録がある交信かく乱剤（性フェロモン剤）が有効です。

◆いちごの育苗管理

定植までの日数を逆算し、7月中旬頃には必要な子苗を確保し、良質苗の生産に努めます。採苗後のかん水について、晴天時は早朝に充分行いますが、乾燥するようであれば午後にも夜間に過湿にならない程度にかん水します。特に、採苗する際に、ランナー先端に形成された子株の不定根が茶色く枯死しているときは、親株へのかん水量やかん水回数が不足していることが多いので、かん水方法の見直しを行いましょう。

幼苗時期の施肥量は多すぎないように注意し、施肥は鉢底から根が確認できる時期から行います。

病虫害防除について、炭そ病は定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には周辺の株とあわせ直ちに処分してください。ハダニについても発生を確認したら直ちに防除を行うなど徹底した管理を行います。また、うどんこ病予防のためにも育苗床での徹底防除が重要となりますが、肥料であるケイ酸カリを1株あたり2～3g施用することにより、本圃での発病を抑制する効果があります。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆かんしょ

ほ場の中に生育の悪い場所があれば、近づいて株を観察し、萎れた株や生育不良の株、葉が黄化又は赤紫色の株の地際の茎を確認しましょう。茎が地際から黒～褐色に変色していた場合や、茎が割れていた場合は、基腐病やつる割病が発生しているため、袋に入れて持ち出します。株を除去した後は、周辺株へ殺菌剤を散布しましょう。発病したつるや芋は、ほ場や周辺に残さないようにしましょう。

各種病害とも排水不良のほ場で拡大する恐れがあるため、排水路の整備・点検を細やかに行いましょう。また、次作への影響を抑えるため、種芋を採取するほ場に入るときは他のほ場作業で使用した農機具や長靴を洗浄したものを使いましょう。

温度が高い夏場の内に、育苗ほの残渣分解を行い、土壌消毒を行いましょう。

◆さといも

さといもの疫病を発生させないため、新しい葉の展開に併せ、株元までかかるように定期的な予防を続けましょう。また、台風による暴風雨により疫病の被害が拡大する恐れがあるため、台風後には治療剤の散布を実施しましょう。

梅雨明け後は、さといもの葉面積が日増しに大きくなり、蒸散量も併せて増加するため、早めのかん水を心がけましょう。3月植えの石川早生は下旬から収穫期となります。試し堀りを行い、肥大状況を確認してから収穫を始めてください。また、収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質低下につながるため、収穫は計画的に行い、8月中旬には終了しましょう。中生種は7月上旬から子芋の肥大、孫芋の着生時期となります。中生種は乾燥による芽つぶれ症状が出やすいため、適宜かん水を行い、品質向上に努めて下さい。

◆しょうが

今月上旬が1回目の追肥適期です。10a当たり窒素成分で3～5kgを施用し、追肥効果を高めるために、土寄せも行ってください。追肥後は、土壌の乾燥防止や地温上昇抑制、抑草を目的として、刈草や稲わらを敷きましょう。

梅雨明け後は急激な気温の上昇と乾燥が予想されるため、涼しい時間帯にかん水を行います。なお、畝間かん水をする場合は滞水しないよう注意しましょう。

◆秋冬野菜の土づくり

秋から冬にかけて栽培する野菜の収量・品質を高めるためには、夏場のほ場管理が重要です。今月は土壌pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥栽培による土づくりを行いましょう。緑肥では、線虫対抗作物を選定するのも効果的です。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

降雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要な時期です。薬剤散布から300ミリの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250ミリの程度の降雨があったら、次の薬剤散布を行きましょう。

◆ 温州みかん

7月中旬から収穫前までが仕上げ摘果の時期です。極早生温州では、7月10日の果実横径は、38～48ミリが理想です。特に結果量が多く、肥大の悪い樹については早めに仕上げ摘果を開始しましょう。樹冠下部は早めに、樹冠上部は遅めに摘果することで、適正な肥大を確保しましょう。樹冠上部を摘果すると、夏枝が発生しますので、収穫時に除去しましょう。

◆ 完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色カビ病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を徹底するとともに、枝をゆすって、花びらを落としましょう。ビニル被覆を行っている園地では、高温による結果不良が出始めるので、早めに除去しましょう。

◆ マンゴー

温度も湿度も上がり、炭そ病や軸腐れ病の発生が多くなる時期です。こまめな収穫や、殺菌剤の散布を徹底しましょう。また、梅雨が明けると強い日射により日焼けが発生しやすくなります。遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫が終わったら、剪定作業に入ります。7月下旬以降の剪定は、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になるため、早めに行いましょう。また、枝の切り口にはペースト剤を塗布します。

既に剪定が終了し、新梢が発生している早期作型園では、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤の利用によって、新梢の充実促進を図りましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆キク共通

梅雨明け後は、曇雨天から一転して日差しの強い日が続くため、葉焼け等が発生しやすくなります。本ぼでは遮光や換気を積極的に行って葉温の低下を図るとともに、蒸散量の増加に見合うように適宜かん水を行いましょう。

また、病害虫の本ぼへの持ち込みを防ぐために、親株床における防除を徹底しましょう。

◆夏秋ギク

「精の一世」の8月出荷作型では、花芽分化・発達を促すために、消灯後から11時間日長となるようにシェード管理を行います。また、高温により草丈の伸長不良、開花遅延や奇形花が発生しやすくなることから、日中は十分な換気を行うとともに、夜間はシェード開放を行いましょう。

「フローラル優香」では、消灯後から2週間程度、12時間日長となるようにシェード管理を行います。また、高温や消灯遅れ、多肥は貫生花の発生を助長することから、適正管理に努めましょう。

◆秋ギク電照

低温開花性系統である「神馬66-4」「神馬2号」は、高温に遭遇すると腋芽が出にくくなる傾向にあり、場合によっては穂が不足する恐れがあります。親株床は遮光を行うなどして温度を下げるようにし、親株の株数も余裕を持たせるようにしましょう。

◆洋花類共通

秋に定植予定のほ場については、土壌分析を必ず実施し、その結果に基づいた適正施肥に努めましょう。

また、土壌消毒を必ず実施し、連作障害の回避に努めてください。なお、太陽熱消毒や土壌還元消毒を行う場合、開始時期が遅くなると、十分な消毒効果を得られない恐れがありますので、早めに準備を行いましょう。

◆ホオズキ

8月出荷分は、上旬から段階的に摘心及び着色のためのホルモン処理を実施します。なお、ホルモン剤の効果消失を避けるために、散布の前後5日間は病害虫防除を控えるようにしましょう。

ホルモン剤散布後の高温は着色不良の原因になります。散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は必ず寒冷紗により遮光しましょう。

◆キイチゴ

過度な収穫により樹勢が急激に低下して枯死する恐れがありますので、樹勢維持のために力枝を数本残すようにしましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆ 家畜防疫対策

豚のCSF（豚熱）は、野生イノシシでの発生はあるものの、豚での発生はなく落ち着いた状況にあります。また、ASF（アフリカ豚熱）は、東アジアでの発生が続いており、これらの法定伝染病から、農場を守るため、消毒等の侵入防止対策を徹底しましょう。

さらに、飼養衛生管理基準の改正が豚では令和二年七月一日に、牛では十月一日に行われます。主な変更点は、①飼養衛生管理者の選任、②衛生管理区域内での愛玩動物の飼養禁止、③放牧制限の準備（避難場所の設置）等となっています。一部では、準備期間が設けられていますが、大幅な変更がされていますので、内容を十分に確認してください。

◆ 家畜

今月は、梅雨が明け、本格的な夏を迎え、家畜や家禽の生産性が低下する時期に入ります。畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、夏期対策を十分に行いましょう。なお、畜舎内への直射日光を遮蔽するために、寒冷紗を設置したり、屋根散水や、屋根への石灰塗布や白ペンキを塗ることも有効な暑熱対策となります。

また、夏場は全ての家畜で、他の季節より多くの水が必要となります。いつでも、新鮮な水が飲めるようにしてください。

さらに、飼料が腐敗しやすい時期になります。色や臭いが悪くなったり、熱をもった飼料は、絶対に給与しないでください。

（三角 久志）

特用作物

◆ 茶

1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から35日程で三番茶の摘採期となります。この時期は、新葉の硬化が早いので摘み遅れに注意します。荒茶の価格と経費を考慮し、計画的で無理のない摘採に努めます。

2 病害虫の防除

害虫では、新芽生育期に発生が多いチャノキイロアザミウマ・チャノミドリヒメヨコバイとハマキムシ類に注意してください。摘採後は、速やかに輪斑病等の防除を実施します。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回るため、茶園や製茶工場の生葉置き場を観察します。なお、本虫に対する問い合わせ等は、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園は、7月上旬と8月上旬に2回の整枝を行います。また、二番茶後に中切りや深刈りした茶園は、8月上旬までに1回整枝を行います。整枝は、いずれも中切りや深刈りの位置から3～5節上げた位置で実施します。特に、中切り実施茶園の整枝は天候に注意し、2回に分けて行う等日焼け防止に注意します。

4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意します。また、ペーパーポット苗でも、植え込みが浅くポット上部が地表から出ている場合は、ポット内の土壌が乾燥し苗が枯死することがあります。いずれも、土寄せや敷きワラ等を行い土壌の乾燥を防ぎます。

1～2年生の幼木園は、台風に備え7月中～下旬に徒長枝の摘心やせん枝を行います。また、ソルゴーの間作は防風効果が高いので台風対策に有効です。播種は、必ず7月上旬までに行います。

(松尾 啓史)

◆しいたけ

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

一 裸地伏せの場合

笠木を厚さ三〇～四〇センチ程度に補充し、直射日光による高温障害に注意するとともに、害菌発生を防ぐため、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

二 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置しましょう。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、林縁の草刈りを実施し、風通しを良くしましょう。

三 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害や害菌の侵入を受けやすいため、遮光ネットによる日陰の調整や散水などにより、温度と湿度の細かな管理を行いましょ。

◆たばこ

今月は、総かぎ収穫が主な作業となります。

一 総かぎは、未熟葉の収穫を避けるため、上位本葉の成熟を確認して開始しましょう。成熟の目安としては葉色だけではなく、葉や中骨が左記の状態になっているか確認して下さい。

- ・葉の表面が凹凸になり葉先が枯れる。
- ・葉全体が下方に巻き葉柄部が下った時（肩を落す）。
- ・上位葉（4枚目）の中骨が白化して中骨の表面が平らとなり中心にミゾができ、ポキッと明音がして折れやすくなる。

総かぎ時の注意点として

- ・着位区分は徹底しましょう。
- ・過熟の、流れそうな合葉の拾い取りを確実にし、収量確保に努めましょう
- ・上葉は標準的な心止めをした作は、3～4枚程度を目安に区分収穫し、包内品位を高めましょう。
- ・立枯葉は活力のあるうちにグジリ取りを行いましょ。乾燥は、当日吊込みが良いです。

二 残幹は土壌中の病原菌密度の増加につながりますので、収穫終了後、早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めましょ。

三 異物・異臭・虫害発生防止のため、作業場の定期的な確認と清掃を行いましょ。

また、出荷包の吸湿による品質低下を防ぐために、貯蔵中の水分管理により一層注意しましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	いもち病(穂) 紋枯病	並 並	<p>葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実にを行います。</p> <p>カメムシの発生が、平年より多い状況です。カメムシによる被害は、早期米の等級格下げの重要な要因ですので発生に注意し確実に防除します。穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底します。防除後も残存虫が確認される場合は、さらに3回目の追加防除を行います。</p>
	セジロウンカ ヒメトビウンカ 斑点米カメムシ類	並 やや少 多	
普通期水稻	いもち病(葉)	並	<p>本田での初発生に注意し、早期防除に努めます。移植時に箱施薬をしていない水田では、防除が手遅れにならないように注意します。</p> <p>海外飛来性害虫(セジロウンカ、コブノメイガ)の本県への飛来が確認されています。飛来状況については、当センターのホームページ等で随時提供していますので、確認ください。</p> <p>ニカメイガは、近年飼料イネにおいて被害が広範囲で確認されています。7月上中旬頃の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的です。</p> <p>スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、粒剤の水面施薬か捕殺を行います。</p>
	ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ コブノメイガ ニカメイガ スクミリンゴガイ	並 並 並 — — やや多	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ タバコガ・オオ タバコガ	並 やや少 やや多	<p>アブラムシ類は、各種のウイルス病を媒介しますので育苗期から防除します。育苗施設は野外からの飛び込みを防ぐために、防虫ネット等で被覆すると効果的です。</p> <p>ハスモンヨトウの幼虫は老齢期になると防除効果が不安定になりますので、若齢期を中心に防除を行います。</p>
ウリ類	黄化えそ病 (MYSV)	—	媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。
サトイモ	疫病	—	圃場の見回りをを行い、発生を認めたら直ちに、薬剤が下葉に達するように十分量を散布しましょう。
サツマイモ	基腐病※※	—	発病株(つるや塊根)は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにするとともに、定期的に銅剤による防除を実施します。排水不良のほ場で多発する傾向がありますので、排水用の溝を必ず設置しましょう。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	<p>予察灯へのツヤアオカメムシの誘殺数は平年並の状況です。</p> <p>成熟の早いナシ・ブドウ等の果樹類を集中して加害する恐れがありますので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。</p>
カンキツ (露地栽培)	黒点病	少	<p>黒点病は、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算降水量250mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行います。</p> <p>かいよう病の発病した枝葉は伝染源となるので、できるだけ除去し、園外に持ち出し適切に処理してください。</p>
	かいよう病	やや少	
茶	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	少 並	<p>ミカンハダニは梅雨明け後の高温乾燥が、増殖に好適な条件となりますので、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5～1頭)での防除を行います。</p> <p>二番茶残葉に炭疽病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除します。</p> <p>カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が困難になるので早期発見・防除に努めます。</p> <p>チャノココクモンハマキとチャハマキの防除適期は、初蛾最盛期の7～10日後で、発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。</p> <p>クワシロカイガラムシの防除適期は、幼虫ふ化最盛期です。時期を逸すると防除効果が低くなりますので、ふ化状況を確認してから薬剤散布を行います。</p>
	炭疽病	やや少	
	カンザワハダニ チャノココクモンハマキ チャハマキ チャノホガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	少 並 並 やや少 やや多 並 やや多	

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比べ、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
- 2) ※※は注意報を発表していますので、詳しくはホームページをご覧ください。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki>です。

